

耐震構造を偽造して作った欠陥マンションに、公的資金が出されることになりました。入居者にとっては大変な問題だとは思いますが、そもそも原因を作ったあの居直りとも見える業者たちの責任はどうなるのでしょうか。公的資金とは、私たちの税金です。怒り心頭です。自分さへ儲かれば、人は死んでもいい、違反を承知で、バレたら、責任を他人に押しつける、なんという身勝手さ。公的資金は使ってほしいところがいっぱいあります。

<第126回 ほほえみの会 >

奈良医師をはじめ7人が参加しました。

▽ 4歳男の子、急性リンパ性白血病。治療を始めて1年、自宅に帰って次の段階の治療に入るが今後のことが不安。幼稚園には来年4月から行く予定だが心配。参加者からは幼稚園は絶対に行かなくてはいけないものでもないし、行かなくても問題はない。1週間に1日ずつ通い始めたという体験談も含め、気にすることはないという話がありました。

また、入院中に下の子供が生まれたが、退院後、赤ちゃんを踏んだり蹴ったりいじめる。兄弟のケアが大切という話も聞くが、10ヶ月の赤ちゃんにどうケアすればいいのか分からない。という悩みも出ました。きっと、入院して寂しいときに、お母さんが出産で来てくれなくて寂しが増し、また退院してみたら赤ちゃんがいてオムツを替えたりお母さんが面倒を見ているので嫉妬心を持ったのではないかという話がありました。

子育てについても、本によって「10歳までは親に十分甘えさせた方がいい」というものがある一方で「3歳までには躾をきなさい」というものもある。どうしていいかわからない。これについても、あまり本に振り回されるのは良くない。子供はみんな個性があり他人とは違うもの。また、同じ病気の治療でも人によって速く進むこと遅くなる子はいる。でも最終的にどうなるかは分からないし、今のいいところを見ていくべきだという話もありました。

▽ 7歳女の子、急性リンパ性白血病。治療が終わったが急な発熱があり入院した。再発ではなかった。治療が終わった子供は何か強いものを神様から貰ったような気がする。ピュアなまま大きくなって強いところと優しい気持ちをもっているように感じる。

発病時、アメリカの病院に入院されたということでアメリカと日本の病院の違いの話が出ました。

3歳で発症し、病院へ入院したが治療が終わるとすぐに退院して、後は自宅で治療をした。定期的に薬が届けられ、看護師さんも自宅に来てくれた。治療中でもなるべくデイケアなど子供たちの集団に出すように言われたが出せず、家で可愛がっていた。アメリカの病院では企業の寄付が非常に多い。寄付をすると税金が免除されるためおもちやでも折り紙でもほしいという沢山届けられる。また、お金を払えばすぐに看護師さんが来てくれるが、こども病院では電話をすればすぐに主治医の医師が相談に乗ってくれるのでありがたい。という話もありました。

▽ 入院中の子供たちの面倒を見てくれる保育士さんの話題もありました。病棟から保育士がいなくなって寂しい。今は顔を覚えた頃に人が変わってしまうので同じ人に面倒を見てほしい。また、集団保育はありがたいが、やはり疾患の違う子供が一緒なのは問題ではないだろうか。

また、「チャイルドライフスペシャリスト」も県立がんセンターにいて、こども病院にいないのはおかしいのではないかと。という話もありました。

県立短大の金城先生によれば、今日本の小児病棟で保育士は3割しかいない。その背景には必要性が十分に伝えられていない。伝える場所も分からない。やはり、国が必要性を認めないと難しいようです。また、日本の保育士にも医療面の勉強をしてもらい、チャイルドライフスペシャリストに似た新しい資格も考えられているとのこと。

病棟保育士ほか入院中のお子さんの生活について、県立短大の金城先生から皆さんにお話を伺いたいという依頼があり、お願い文書を同封します。ご協力をお願いします。良いお年をお迎え下さい。

次回は 1月8日(日) 11時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一 TEL054-247-9560

E-mailアドレス k_likeda@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.geocities.jp/hohoeminokai/>